



スギノアカネトラカミキリの被害に 注意しましょう

スギノアカネトラカミキリの生態と被害

スギノアカネトラカミキリ(写真1)は、体長9~14mmほどのカミキリムシで、幼虫は20~25mmのてっぽう虫型で乳白色をしています。幼虫はスギ、ヒノキの枯れ枝から樹幹に穿孔します。場所によっては“枝虫”と呼ばれています。穿孔部分は材内に坑道ができるほか、そこから周囲の材に変色や腐朽が広がり、被害が拡大します。この害虫は長らく山梨県では未確認でしたが、近年、南部町で1例発見され(写真2)、その後、被害は見つかっていませんが、神奈川県や岐阜県等では大きな被害が出ており、予断を許さない害虫です。

スギノアカネトラカミキリの幼虫による穿孔被害は樹幹の内部で起こるため、製材しないとなかなか発見できません。このため、どの程度の被害がどこで出ているのかを把握するのは容易ではありません。

山梨県ではこれまで被害報告がなかったことから見ても、被害は軽微だと思われていますが、被害発見に努める必要があります。

スギノアカネトラカミキリは枯れ枝に産卵します。孵化した幼虫は、はじめ枯れ枝内を食害しますが、やがて樹幹へ移動し樹幹内部を掘り進み、その部分が変色や腐朽を起こし、材を劣化させます。腐れが材内部の所々に入るため、「飛び腐れ」と呼ばれています。やがて大きくなった幼虫は再び枯れ枝へ移動し、そこで蛹になり、羽化した成虫が樹皮に穴を開け出て行きます(写真3)。

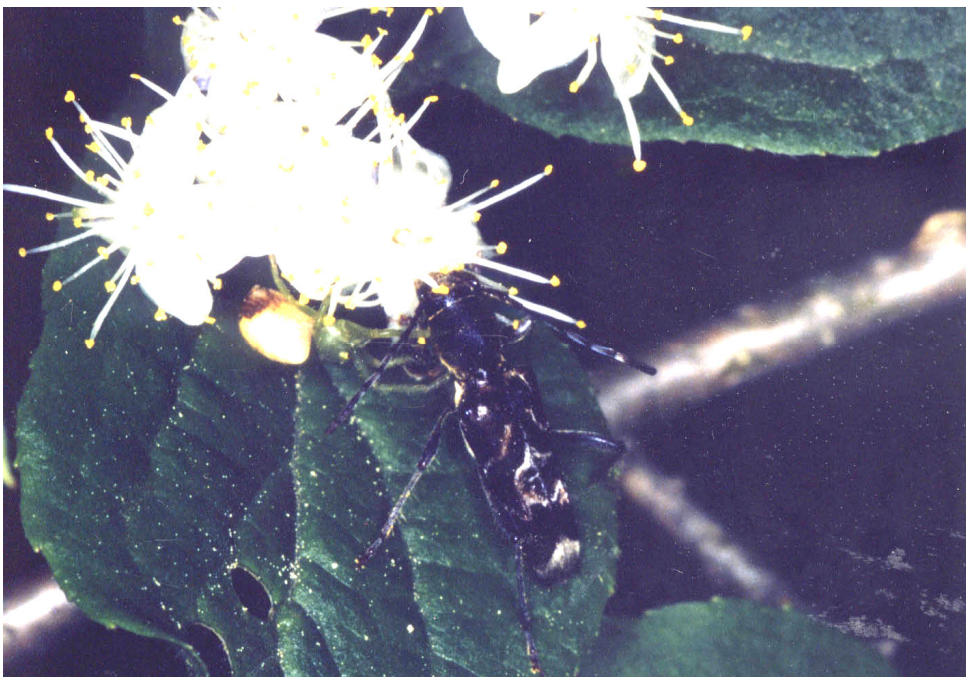


写真1 スギノアカネトラカミキリ 成虫は春に花を訪れます。(新潟県森林研究所提供)

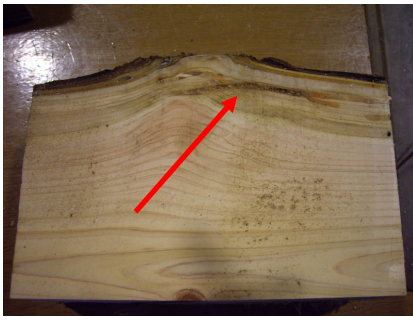


写真2
幼虫の食痕



写真3
材内にいた
脱出前の成虫
(岐阜県森
林研究所提供)

被害の見分け方

枝打ち作業をしたときに、枝の断面に出てくるスギノアカネトラカミキリ幼虫の食痕が見分けるための有効な手がかりとなります。枝から幹に食痕が続いていれば、スギノアカネトラカミキリの可能性が高いです(写真4、5 枝だけで坑道が止まっている場合は、他のカミキリムシによる場合が多い)。製材したときに材の断面を観察する必要もあります。変色や腐れがあった場合は、スギノアカネトラカミキリの坑道がないかチェックが必要です。幅4mm以下程度の孔が辺材部にあった場合は、本害虫の被害を疑ってみる必要があります(写真6)。

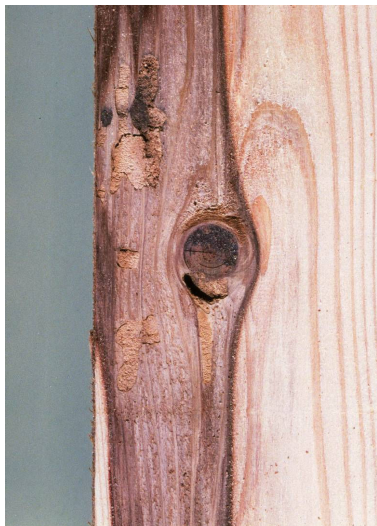


写真4
幼虫が樹幹へ侵入した時の坑道と辺材部に見られる坑道及びその周囲に広がる「飛び腐れ」
(新潟県森林研究所提供)



写真5
老齢幼虫が枯れ枝に戻るための坑道
(新潟県森林研究所提供)

被害対策

材の中で幼虫が被害を起すため、直接的な対策が困難です。産卵は枯れ枝で行われ、初期の幼虫も枯れ枝で大きくなりますので、また蛹が枯れ枝で作られますので、枝打ちを行うことにより枯れ枝を減らしスギノアカネトラカミキリが産卵したり、蛹化できないようにします。

スギノアカネトラカミキリの個体数がとても多いところでは、粘着バンドを幹に巻き捕殺します。

スギノアカネトラカミキリによる被害は、まだ山梨県では発見されたばかりです。特に林業関係者で枯れ枝や材に本害虫の被害と思われるものがありましたら、森林総合研究所まで連絡をお願いします。



写真6 樹幹断面に現れた幼虫の坑道と変色状況

監修：山梨県森林総合研究所
森林研究部
主幹研究員 大澤正嗣

編集：普及指導部
TEL 0556(22)8001
FAX 0556(22)8002